高木正義の社会学模索

川合隆男

一　はじめに
二　高木正義と明治三〇年前後の社会学界
三　高木正義の社会学模索
四　むすび

一　はじめに

ここに「高木正義の社会学模索」と題して小論をまとめておこうとするのは、明治三〇年前後にかけての学問運動としての近代日本社会学の形成の最初の組織化の試みである「社会学会」「社会学研究会」での活動、東京帝国大学社会学講師・慶應義塾社会学講師などとして、高木正義（一八六三―一九三二年、文久三―昭和七年）は形成当初のこの期の社会学の動向に重要な一翼をになった人物であるにもかかわらず、近代日本社会学史研究上充分な注意がはらわれてこなかったからである。(1)

明治二〇年代、明治三〇年代という歴史状況は、わが国の近代国家体制の急速な形成と近代資本主義の成立期、しかも日清戦争と日露戦争という戦中期、そして戦間期にもあたり、人々が未曽有の生活変化を余儀なくされ、多くの社会問題、産業・労働問題、生活問題が深刻化し、貧富の衝突や階級分化も進み、それらに対し勢い社会運動や労働運動が抬頭しつつあった時代状況であった。そして、こうした社会問題、労働問題、生活問題の存在が広く人々の注目をあつめていくようになるには、それらの問題の広がりと深まりに加えて、他方にはさまざまの関心をもつ一群の識者、活動家や官僚などの動きがあったからでもある。(i)新聞記者、文学者などを中心に実際の問題状況についての「社会の観察」を深めていこうとする動き、(ii)広い意味での社会運動として社会の改善・改良、自立的改革、更には変革を志向していこうとする動き、(iii)官僚や官立大学などの学者等が中心となって国家行政・権力の側から社会政策論的立場に立って社会問題に対処し方向づけていこうとする動き、(iv)「統計協会」(明治一三年結社)、「国家学会」(明治二〇年設立)、「社会政策学会」(明治二九年設立)、「社会学会」(明治二九年一一月)、「社会学研究会」(明治三一年一二月)などのように一種の学問運動・学問活動として社会問題の性質をさまざまの観点から学問的に解明していこうとする動きなどが、特にこの時期において互いに交錯して展開されていったことが大きな特徴であった。

高木正義の場合も社会問題や学問運動等とのかかわりは、(ii)の社会運動や(iv)の「社会学会」「社会学研究会」などの学問活動とが重複する形で特に学問運動としての近代日本社会学の形成との関連で考察し得る。これまでの近代日本社会学史研究において、高木の社会学活動が極めて短期間に限られていたこともあって高木正義に関しては、主として「社会主義研究会」「社会主義協会」等とのかかわり、「社会学会」「社会学研究会」での活動、わが国における心理学的社会学の萌芽・形成との関連で言及されてきた。

河村望『日本社会学史研究(上)』(一九七三年)では、その「第三章　社会主義思想の紹介と社会学の対応」で高木正義の活動をとりあげている。「ところで、高木正義を中心とする、いわゆるコロンビヤ学派の社会学の導入の過程は

どのようなものであっただろうか。高木が岸本能武太などとともに「社会主義研究会」の有力な会員であったことはすでに指摘したが、彼は「社会主義研究会」が一九〇〇年一月に名称を「社会主義協会」と改め、「研究のみしたりとて手を実行に着けざれば益なかるべし」として実践へ一歩を進めたときには、すでに退会していた。彼の「社会学」の特徴は、むしろギディングスの影響をうけて心理学的社会学を導入したところにある[2]としてこの時期の社会学と社会主義との関係、社会学の特徴について触れられている。秋元律郎『日本社会学史――形成過程と思想構造――』（一九七九年）においても、当時の社会問題に対応して結成されていった「社会主義研究会」、「社会主義協会」、「社会学研究会」と高木正義らのかかわりについて言及されておられる[3]。斎藤正二『日本社会学成立史の研究』（一九七六年）では、主として「社会学研究会」の結成に関連して布川孫市らとともに高木の名前が挙げられているが、詳しくは言及されていない。高木正義の心理学的社会学の特徴についてこれまで比較的に詳しく考察した研究としては高橋徹「日本における社会心理学の形成」[4]（一九六五年）においてであったと考えられる。そこでは、高木の社会学観をめぐって高木の論稿にみる(1)現代社会における社会学の位置、(2)社会学と社会諸科学との関係、(3)社会現象論――心理学的社会学への傾斜――、(4)実証的調査の着行という諸点から検討を加えて、「……思想の未熟性や理論の断片性を蔵していたとはいえ、高木は従来の「有機体論社会学」を「心理学的社会学」の方へ転換させるうえでの転轍器のごとき役割を果すものであった。そしてそれを機に遠藤、樋口、小林の心理学的社会学が展開してゆくのである[5]。」という位置づけを試みておられる。

これらの従来の考察はいずれも適切なものとも考えられるが、近代日本社会学史研究においては特に明治期に関してもいまだに学史研究は不充分であり、明治期社会学界立役者のひとりである高木正義についても資料の不足と高木の社会学界とのかかわりが極めて短い期間であったこともあって充分に研究がなされてこなかったといわなければならない。この小論では、そうした不充分さを少しでも埋めるべく、高木正義の生涯の足跡を辿る形で高木の社会学模

索を跡づけておきたい。依然として資料不足は免れ難いが、以下、二　高木正義と明治三〇年前後の社会学界、三　高木正義の社会学模索、の順で検討していくことにする。

二　高木正義と明治三〇年前後の社会学界

「社会主義研究会」「社会主義協会」、そして「社会学会」「社会学研究会」などに名前を連ねて、それらの立役者のひとりとして知られてきた高木正義の生涯の足跡はいまでもかなりの部分が不明である。

(一)　高木正義（一八六三年二月一〇日－一九三二年一月二九日）の略歴

明治末年に刊行された『実業家人名辞典』には高木正義について写真をそえて次のように紹介している。

君は山形県の人（後籍を神奈川県に移す）文久三年二月十日を以て、西田川郡鶴岡町に生る、厳君を三郎氏と称し、君は其養嗣子となり、夙に聡明の質を以て、研学に志し、年少東上して東京英和学校（現青山学院）に入り、十九年業を卒へ、翌二十年米国に航し、紐育州シラキュース大学に入り、二十四年六月優等の成績を以て全科を卒業し、同年十月より二十五年六月迄同州オルバネー市オルバネー商業学校に在りて商業経済の学を修め、同年九月ボルチモア市ジョンスホプキンス大学院に入り、経済、社会の諸学を研究し、二十八年卒業してドルトル・オブ、フィロソヒーの学位を得、二十八年七月より二十九年四月までニューヨーク市コロンビヤ大学に特待生として、経済学社会学の蘊奥を極め、二十九年四月獨逸に赴き伯林大学に遊び、三十年欧州諸国及び、其他各大学を廻歴し、三十年七月満腔の抱負を齎して帰朝す、同年十二月聘せられて東京帝国大学文科大学講師となり、社会学講座を担当し、傍ら慶應義塾大学講師を兼ね、経済学及び社会学を講じ、該博なる学殖を傾注して後進の指導に努むると共に三十二年十二月株式会社第一銀行に入りて、其実業的手腕を試み、三十四年同行検査課長となるに及び教職を退きて、専ら行務を執掌し、三十五年五月同行京城支配人となり、朝鮮金融界に其手腕を揮ふ、三十七年職を辞して外資輸入業を開始し、傍

ら八平軽便鉄道株式会社発起人、西武軽便電気鉄道会社発起人其他二三の新事業に関係し、画策甚だ努めつつあり、君が従来取扱ひし公私の起債中重要なるものは長野市公債、青森市公債、富士製紙会社社債、富士水電株式会社社債、名古屋電燈株式会社社債等あり、人と為り濶達にして頭脳明快、手腕縦横にして、蘊蓄深し、取って以て新進実業家の典型となす可し。[6]（自宅神奈川縣鎌倉町、事務所東京市京橋区銀座四ノ一、電話京橋二五二）

高木正義は旧姓が井村正義であったが、高木三郎家の養嗣子となって高木姓になった。高木正義『高木三郎翁小伝』のなかに「……明治十九年八月旧庄内藩士井村正利の三男正義を養いて嗣子となし明治三四年四月長女利與子に配せり二男二女を挙ぐ[7]」と記されている。この『実業家人名辞典』によると、一八八六（明治一九）年に東京英和学校（明治二七年に青山学院と改称）を卒業後、以後約十年間主にアメリカ合衆国で勉学し、更にヨーロッパ諸国に遊学して一八九七（明治三〇）年に日本に帰国している。明治期の社会学界と高木正義とのかかわりは、明治三〇年代前半に限られており、以後は厳父（養父）高木三郎との関係もあったのか実業界にかかわりを深めていったと思われる。主として社会学界にかかわる高木正義の著作は、現在知り得るものを挙げておくと以下の通りである。

- 「社会学一斑(1)、(2)」、（『社会雑誌』第一〇号、第一一号、明治三一年二月、四月）
- 「社会学一斑(3)（社会進化論）」（『社会雑誌』第一二号、明治三一年五月）
- 「社会学は他の社会的諸学科の原理なり」（『哲学雑誌』第十三巻、一三六号、明治三一年六月）
- 「社会学研究の必要」（『社会』一巻一号、明治三一年一月）
- 「貧民の救助」（『社会』一巻五号、明治三一年七月）
- 「社会現象論」（『社会』一巻七号、明治三一年九月）
- 「滋賀縣南野貧民窟（其一）」（『社会』一巻七号、明治三一年九月）
- 「滋賀縣南野貧民窟（其二）」（『社会』一巻八号、明治三一年一〇月）
- 「滋賀縣南野貧民窟（其三）」（『社会』一巻九号、明治三一年一一月）

・「飛騨の白川村」(『社会』一巻九号、明治三二年一一月)
・「社会概念論」(『慶應義塾学報』一三号、明治三三年一月)
・ドクトル高木正義纂訳『トラスト』東京専門学校出版部、明治三三年七月。
・「貧民論」(『社会』二一号、明治三三年一二月)
・「船の社会」(『社会』二一号、明治三三年一二月)
・「貧民論(承前)」(『社会』三巻一号、明治三四年一月)
・「渡米見聞談」(『慶應義塾学報』三五号、明治三四年一月)
・『米国信託会社業務調査報告書』(明治三四年二月)
・「モルモン宗に就て」(『社会』三巻四号、明治三四年四月)
・「モルモン宗に就て」(『社会』三巻五号、明治三四年五月)
・「社会学と経済学との関係」(『社会』三巻六号、明治三四年六月)
・「社会生理一斑」(『社会』三巻七号、明治三四年七月)
・「社会学と政治学」(『社会』三巻八号、明治三四年八月)
・「韓国の教育事業」(『社会』三巻一二号、明治三四年一二月)
・「信託会社の業務及組織」(『社会』三巻一二号、明治三四年一二月)
・「社会学研究会の本領」(『社会学雑誌』第四巻一号、明治三五年二月)
・「社会概念論」(『社会学雑誌』第四巻二号、臨時増刊、明治三五年二月)
・「社会教育の必要」(『慶應義塾学報』四九号、明治三五年二月)
・「社会学の対象」(『社会学雑誌』四巻三号、明治三五年三月)
・「信託会社に関する法制の比較研究」(『社会学雑誌』四巻三号、明治三五年三月)
・高木正義著『信託会社要義』教文館、明治四〇年三月
・『高木三郎翁小伝』高木事務所、明治四三年三月

高木の社会学に関する執筆はほぼ明治三〇年代前半に集中している。『高木三郎翁小伝』（明治四三年）は、厳父高木三郎[8]の一周忌にあたり、「余少にして高木家に養はれたるも或は上京遊学し或は米国に留学し帰朝の後も先君は常に神奈川に在りて余は東京に住みて」いたために、『小伝』を記すうえで、三郎翁の少年時代については「義姉たる黒川千勢子」、「勝塾時代及び留学時代」は富田鉄之助氏、「同伸会社時代」は林鶴太氏などに聴取しながら、養嗣子の正義がまとめたものである。また、同書「本書刊行に就て」のなかで、高木正義の卒業後に相前後してあとから東京英和学校に入学して同窓であり明治期社会学界のもうひとりの立役者布川孫市に関して「本書編纂に就ては友人布川静淵君の助力を得たる所少なからず」と記されているのも興味深い[9]。

一八九九（明治三二）年一二月第一銀行に入行した当時は社会学、経済学の学問活動をも兼務していたが、一九〇二年頃よりは専ら実業界に入っていたものと思われる。一九〇七（明治四〇）年二月二日付『国民新聞』には私立青山学院財団の法人設立登記公告のなかに、「理事の氏名住所」のところに小方仙之助、本多庸一、エムシー・ハリスなどの名前と並んで「豊多摩郡渋谷村大字下渋谷二百五十五番地　高木正義」の名が記されていた。関東大震災後の『青山学報』（第二三号附録）の「校友会報」には「東京市外下渋ヤ五七　高木正義」は、その後「住所不明」で「御手数でも」「御報知下さるよう」に付されていた。しかしながら、その後の高木の消息は定かでない。布川孫市による「明治三十年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」（昭和三年）のなかで次のように述べていた。

> 茲に一言高木氏に就て申上げます。同氏は外山博士の後を承け三十一年より三十四年頃まで、東大で社会学講師に與り、早稲田専門学校にも講義された。シュラキウス、ジョンホプキンス等の大学を経たるドクトル、大学の講師を止めて後銀行界に入り更に実業に従へるが、事志と違い現今は天津に在住しています。同氏は社会学よりも信託会社研究の嚆矢者として寧ろ著名です。田尻博士の「財政と金融」には信託事業の部に必ず高木氏の紹介が記されています。同氏は彼の富田鉄之助、勝小六（海舟翁の息）氏等と同道渡米せる高木三郎氏の養子です。（勝氏等の渡米は維新前の事にて当時の同船者に今日の高橋是清子があった[10]。）

高木正義は、晩年を中国大陸、天津に居住し、一九三二(昭和七)年一月二九日に天津で死去している。[11]『天津居留民団三十周年記念誌』のなかに天津日本高等女学校の創立(大正一〇年)沿革に関して「当時の生徒数は二十四名で(吉田)房次郎氏夫人吉田重子女史を校主として、高木正義氏幹事となり校務を掌り[12]」と記されていたから、この当時より天津に滞在していたものと思われる。布川孫市が高木について「事志と違い」(傍点筆者)とは何を云わんとしたのかは知るべくもないが、高木正義は日本の中国大陸への進出侵略に抗して中国人民による抵抗運動、抵抗戦線がいよいよ強められつつあった激動の天津で客死し生涯を閉じた。

(二) 社会学講師高木正義と明治三〇年前後の社会学界

高木正義が米国等の留学より帰国して学問運動としての社会学の活動に参画し大学等を中心に組織化され制度化されていく形成過程の当時の社会学界の状況はどのようなものであったのだろうか。近代国家体制化と文明開花を急ぐ当時にあっては、西洋の諸々の文物・制度等の導入も日本人自ら視察、留学、輸入、翻訳等そしてお雇い外国人等を通じて積極的に進められた。東京大学では一八七八(明治一一)年に米国のフェノロサ(E. F. Fenollosa, 1853-1908)が哲学・政治学・理財学教授として来日し政治学の前提として社会学の講義を始めている。フェノロサは東大に明治一九年まで在職して社会学を講義したが、この当時は「社会学」と訳されることは少なく講義名としては「世態学」という名称であり、H・スペンサーの社会進化論を基礎にした講義であった。[13]東大ではフェノロサのあとは、外山正一(明治三〇年一〇月に東京帝国大学総長となる)――高木正義(社会学講師、明治三〇年一二月―三四年七月まで)・建部遯吾(明治三一年八月海外留学―三四年一〇月帰朝)――戸田貞三などに引き継がれていった。

明治三十年十一月外山教授東京帝国大学総長となるに及んで、ここに社会学講座担任を去り、代って高木正義及び建部遯吾両

講師が、これを分担することとなった。高木講師は爾後明治三十四年七月まで社会学講座の事実上の担当者であった。同講師は「社会学」と題して主としてギディングズ（F. H. Giddings）の社会学を祖述した。奉職の期間は僅かであったが、心理学的社会学の移植について同講師の力は多としなければならない。建部講師は明治三一年八月社会学の研究のために欧州に留学し、留学中三十三年六月助教授に任ぜられて、三十四年十月帰朝して直ちに教授に任ぜられて、社会学講座担任となった。(14)

帰国後間もない高木正義は、外山正一のあとを受けて、明治三〇年一二月より同三四年七月まで「社会学講座の事実上の担任」であった。そして、留学中の建部講師の助教授任命の約半年前の明治三一年一二月には第一銀行に入行していたので、同三四年七月までは銀行業務との兼職の社会学講師であった。高木の執筆著作一覧をみるかぎりではこの時期にはまだまだ社会学に関する論稿も多く見受けられるが、すでに彼の主たる関心が銀行界・実業界に移っていたのかもしれない。他方、この時の東京帝大の社会学講座人事をめぐる経緯も定かでない。「明治三十年前後の社会学界、社会運動」に関して後に追談している布川静淵（孫市）は、その当時の諸学校における社会学担当について次のように述べている。

当時学校に於ける社会学は如何なりしかと云うに、三十三年頃は東大に高木氏、早稲田に浮田和民氏、高等師範に遠藤隆吉氏、本願寺大学に岡百世氏、明治女学校高等科に私が講義しました。三十五年頃は右の外、建部博士は東大に、巣鴨大谷派大学に樋口秀雄氏、京都同志社にロンバート氏の講義担任があった。明治三十年直後は其以前のスペンサー一天張（ママ）よりは相当に変った趣きがあることを推察されましょう。(15)

一八八二（明治一五）年に創立された東京専門学校（明治三五年九月に早稲田大学と改称）では、東京大学で有賀長雄らと同級であった高田早苗がまず明治一五年に専ら「スペンサー氏著社会学」を講義し、明治一七年度は坪内雄蔵（逍遥）が「社会学」を担当し、以後、明治三二年まで三宅雄二郎（雪嶺）、立花銑三郎、岸本能武太（同志社出身）、大石熊吉郎、建部遯吾、高木正義らが短期間で交替した。次いで明治三三年には同志社より招かれた浮田和民が社会学を歴史学、

政治学などともに担当していた。また、この当時やはり同志社出身の安部磯雄は「社会政策」や「都市問題」を担当していたのである。明治四二年には遠藤隆吉も招かれて社会学を担当していた。[16]

慶應義塾においては、明治一〇年に東京開成学校と東京医学校とが合併改称して「東京大学」（明治一九年に東京大学は帝国大学令によって東京帝国大学となる）としてすでにスタートしていた東京大学等と較べると、当時は講義課程はまだ未分化で、「社会学」（世態学）がひとつの独立した教科目としては設置されていなかった。専らウェーランド、ギゾー、バックル、トクヴィル、ミル、スペンサーなどの洋書・英書を原典で、「スペンサー氏社会学講義」や「ミル氏代議政体論輪読」のような形で「英書訳読」や「翻訳」の科目で学び取っていた。そのことが福沢のもつ思想に強く影響されつつ西洋の自由主義的な社会思想や新しい学問動向をいち早く摂取し文明を開き普及させていく大きな力となった。[17]

「社会学」が慶應義塾の教科課程のなかで教科として設置されたのは、一八九〇（明治二三）年一月の大学部開設以降のことと思われる。『創立百二十五年、慶應義塾年表』によると、明治二三年一月二七日に「大学部第一回始業式挙行。入学者五十九名（文学科二十名、理財科三十名、法律科九名）[18]」と記されている。大学部開設は私学界未曽有の事として一般には非常に注目され、「……次で来るべき我国私立大学の勃興に対する大刺激となり、実に日本文化史上大に誇るべきものであったことは勿論であるけれども、然し始めの頃塾内に教授の用意があった訳でなく、殆んど全部他よりの助力を借らざるを得なかった。主任教授が各科共外国人であったばかりでなく、其他殆んど皆他校出身者であった」。[19]

当時の義塾大学部におけるこのような外国人教師や他校出身の講師等による講義の事情は、社会学についても全く同様であった。米国ハーバード大学より招聘した文学科のW・S・リスカム、理財科G・ドロッパース、法律科のJ・H・ウィグモアがそれぞれの学科主任であり、学科の主要科目を担当したことはよく知られている。「社会学」は、大

学部開設以降に主として文学科を中心に設置され、」・ライド（「社会学」担当明治二五年一月―三〇年一月）、ウード（明治三〇年一〇月―三一年一月）、G・ドロッパース（明治三一年一月―同年末。ドロッパースは明治三二年一〇月に二九歳で来日して、明治三一年まで在籍し「近世経済史」「財政論」「経済学諸派概論」「貿易論」などの科目を担当していたが、この期にはウードのあとに一時的に急遽「社会学」をも合わせて担当したものと思われる）らの外国人教師が担当して、そして、彼らのあとには高木正義が、東京英和学校出身で米国留学より帰国して、当時東京帝国大学で社会学講座を建部遯吾講師（この時期欧州留学中）と分担していたが、慶應義塾にも出校してきて講義を続けていたのである。

『慶應義塾百年史・別巻（大学編）』のなかで日本人教師による科目担当について、「高木正義（社会学担当）（明治二八―三四年）明治二三年ごろアメリカに留学、明治三〇年―三四年東京帝国大学文科大学社会学講師」[20]とあるが、先に触れた略歴に照らせば高木は明治三〇年七月帰国しており「明治二十八年―三十四年」の担当とあるのは明らかに誤りと思われる。政治科での「社会学　ドクトル・ヲブ・フィロソフィー　高木正義」[21]とあるように文学科でも政治科でも明治三二年四月より同三四年度中途までの担当であったと思われる。同時にこの期間に理財科では「貨幣論」「銀行論　高木正義（明治三二―三四年四月）」をも兼担していたし、「三田経済学研究会」の設立にも関係していた[22]。明治三四年度中途での高木の辞任[23]後は、建部遯吾[24]、川合貞一などが一時的な形で担当したあとに「社会学」を担当したのは、慶應義塾の専任の初代社会学教授とされる田中一貞（一八七二―一九二一年、明治五―大正一〇年）であった。田中は明治二六年に塾大学部文学科に入学、明治二九年一二月に卒業、明治三二年四月に第二回義塾派遣留学生として海外留学し同三七年三月に帰国、同年四月に大学部教授に就任する。以後文学科、理財科、政治科などで「仏語」と「社会学」を専ら担当した。

高木正義がほぼ明治三〇年から明治三五年頃までの間に、留学より帰国早々の新進の学者、社会学講師として、また社会運動家として登壇し活動して、学問運動としての近代日本社会学の形成という動きにも加わっていくことにな

る。一八九七(明治三〇)年一〇月に帰国した高木は、翌年の一〇月に日本最初の社会主義研究組織とされる「社会主義研究会」(一八九八年一〇月―一九〇〇年一月)の会員のひとりとして、高木正義、河上清、豊崎善之助、岸本能武太、新原俊秀、片山潜、佐治実然、神田佐一郎、村井知臣、幸徳秋水、金子喜一らとともに名をつらねて参画した。これはユニテリアン協会にかかわるキリスト教社会主義者によって、「本会ハ社会主義ノ原理ト之ヲ日本ニ応用スルノ可否ヲ考究スルヲ目的」として設立された研究団体、学術団体であった(『六合雑誌』第二一五号、明治三一年一〇月二五日、七五―七六頁)。明治初年から明治三〇年代期までの社会学の草創期、形成期の動きの多様な系譜として次のような動きが注目される。(i)福沢諭吉、J・S・ミル、H・スペンサーなどの哲学思想・社会思想・社会学思想にみる近代自然法思想、自由主義、社会進化論の系譜、(ii)西周、フェノロサ、外山正一、有賀長雄、加藤弘之、建部遯吾などにみる社会進化論、社会(国家)有機論、講壇社会学の系譜、(iii)片山潜、安部磯雄、浮田和民、岸本能武太、布川孫市、高木正義などキリスト教関係者などによる社会運動、社会主義、社会改良・社会事業との関連にみる系譜、(iv)松原岩五郎、横山源之助、杉享二、呉文聡など民間在野のジャーナリスト、一部行政官僚による社会観察、社会統計事業などにみる経験的社会論、経験的社会学の系譜などである。

このような諸系譜に照らせば、高木正義の社会学模索は(iii)のキリスト教関係者による系譜に属するものであった。この(iii)の系譜は、明治二〇年代から明治三〇年前後にかけての社会運動、学問運動、社会主義、社会学、社会改良事業、社会政策などが互いに交錯していた当初の状況から、次第に現実の歴史状況の激変と政治姿勢や思想上の違いからその後には片山潜などの社会主義と元良勇次郎、布川孫市、高木正義などの心理学的社会学とに分化していくことになる。従来の日本社会学史研究においては、社会有機体説、国家有機体説から心理学的社会学へ、社会学と社会主義のように、潮流や系譜の段階論的な特徴づけが強かったが、特に明治三〇年前後の社会学の動きは諸潮流・系譜がむしろ互いに交錯し競合している状況として検討されるべきである。学史研究の視座や方法論のとり方によって、近

代日本社会学における学問運動上の動態的な動きを見落しかねない。その意味ではそうした競合状況が渦巻き、わが国の学問運動としての社会学の最初の組織化、制度化の試みであった「社会学会」（一八九六―一八九八年、明治二九―三一年）や「社会学研究会」（一八九八―一九〇三年、明治三一―三六年）の学会活動[25]において、中心的に活躍した布川孫市、高木正義、加藤弘之などについての研究はいまだに充分とはいえないのである。

「社会学会」の機関誌『社会雑誌』第一巻一号（明治三〇年四月）の「発刊の要領」には、「『社会雑誌』は人間の歴史的発達一般社会の進化開展の理法を究め親しく実際社会の生活を調査し社会改良の方針を示さんことを期す」、「『社会雑誌』は社会学、社会主義、社会問題等に関する諸般の事件を論議する専門雑誌なり」、更に「『社会雑誌』は徒らに社会制度を破壊せんとする者に興せず、而も思想界に立て根本義より、社会の改良を計らんことを期す」とあった。『社会雑誌』（第一巻一号―第一五号、明治三〇年四月―三一年八月）は短命であったが、キリスト教系の人々の執筆が多く、布川静淵（孫市）（山形東根、無識庵主人などの名は布川の別名）、片山潜、高野房太郎、加藤弘之、松村介石、井上次郎、田島錦治、島田三郎、生江孝之、佐久間貞一、小河滋次郎、高木正義、呉文聡、横山雅男、石川惟安などが執筆していた。

「社会学会」の後に加藤弘之、元良勇次郎、高木正義、富尾木知佳、岡百世、武井悌四郎を発起人として「社会学研究会」が明治三一年一二月に（一八九八―一九〇三年、明治三一―三六年）発会設立された。会長は加藤弘之、評議員は元良勇次郎、有賀長雄、小河滋次郎、戸水寛人、呉文聡、高木正義であり、委員は武井悌四郎、岡百世、富尾木知佳、布川孫市、十時彌、高桑駒吉、五来欣造という役員であった。この研究会の会則によると、その第二条に「本会の目的は社会学の原理、社会問題及び社会改善策を研究するものなり」とあり、先の「社会学会」の『社会雑誌』発刊の要領にあった「社会主義」は消え社会学、社会問題及び社会改善策の研究という性格を一段と強めていった。「社会学研究会」の機関雑誌は『社会』（第一巻第一号―第三巻第十二号）（明治三三年一月―三四年一二月）、『社会学雑誌』（『社会』の

改題追号で第四巻第一号―第五巻第三号)(明治三五年一月―三六年四月)であった。『社会』では、小河滋次郎、原胤昭、小西信八など社会事業、改良事業に関係した人達も少しは書いているが、片山潜「日本に於ける労働」(一巻四・五・六号)や窪田静太郎「社会的制度一班」(一巻六・七号)、「労働者強制保険」(一巻八号)などを除けば、高木正義、有賀長雄、浮田和民、岡百世、十時彌、久松義典、樋口秀雄、元良勇次郎、呉文聡、井上哲次郎、坪井正五郎、石川千代松などで社会学者、心理学者、統計学者、哲学者、人類学者、生物学者などの学者の執筆が多いのが大きな特色であろう。なかでも、多く書いているのは高木正義と布川孫市であった。『社会学雑誌』の主な執筆者は、高木正義、布川孫市、岡百世、十時彌、久松義典、三輪田元道、樋口秀雄、呉文聡、加藤弘之、大原祥一、豊原又男、鵜沢幸三郎、田中太郎、前田貞次郎などであった。他に穂積陳重、小河滋次郎、河上肇などの寄稿もみられる。社会学の専門誌としての性格を強めつつも、当時の労働問題、社会問題をも反映して「社会時評」「時事偶感」として工場法案、婦女・幼年労働問題、警察令、移民事業、離婚問題などをとりあげていた。高木正義の明治三〇年代前半期に集中していた彼の社会学模索の特徴を検討するには、この「社会学会」「社会学研究会」の機関誌『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』などに残されている論稿を再考察していくことがわれわれに託された限られた機会、のひとつでもある。

三　高木正義の社会学模索

「社会学会」の機関雑誌『社会雑誌』に執筆したりして関係した主な人々は、布川孫市、加藤弘之、呉文聡、高野房太郎、佐久間貞一、巌本善治、島田三郎、三宅雄次郎、田口卯吉、片山潜、松村介石、田島錦治、高木正義、小河滋次郎、原胤昭、横山雅男、石川惟安などであった。高木正義が米国・欧州諸国の留学より帰国したのは一八九七(明治三〇)年七月であったが、彼が「社会学会」『社会雑誌』に関係し始めるのは明治三一年初めからであった。布川孫市

は丁度この当時キリスト教系の学校、明治女学校の教師として社会学を講じ始めた時期であり、わが国において学問運動としての社会学の形成に直接かかわる学会組織・研究組織として初めて組織された「社会学会」は明治二九年一一月に設立され、布川孫市（静淵）がキリスト者として宗教運動、社会運動、学問運動にかかわる人々や、明治女学校、『女学雑誌』、東京英和学校（青山学院）などに連なる人脈を活用して発足させ主宰した学会であったといえる。「社会学会」の『社会雑誌』、そしてそれに続く「社会学研究会」の『社会』『社会学雑誌』の発足発刊を促した背景は、近代日本の新たな政治的経済的な激動と社会的激変、それらにともなう生活問題、社会問題の出現、更に人々に潜在する心理的精神的な、宗教的な動揺と不安等にあったが、若い新進の学徒としての布川孫市や高木正義らが中心となって、キリスト教系の主として民間の社会事業・社会改良・社会運動者、学者、教育者、政治家、実業家等の賛同・参加を得て、加藤弘之、元良勇次郎、呉文聡などのように官立大学や官庁の学者、統計家、片山潜や高野房太郎などのように労働問題、社会運動、社会主義等に強い関心をもつ人々をも含めた、いくつもの思想傾向を内包した学問運動・活動が試みられたことにあった。幕末から明治前期のうち続く歴史的社会的激動に直面して、特に「欧米の新空気に触れ、博愛事業に親しみを有し、自ら貧民、労働者等に同情を有する」[26]青年達を結集させて、政治運動としての自由民権運動が後退していく明治二〇年代以降において、内在的にはキリスト教に根ざす新たな宗教的な、思想的な関心に支えられつつ、「社会学、社会主義、社会問題等に関する諸般の事件を論議」（『社会雑誌』）、「社会学社会問題及社会政策上の評論」（『社会学雑誌』）を試みていったのだった。

若い布川孫市は、「宗教家は社会心理的問題に着目すべし」（『日本宗教』第一巻九号、明治二九年三月）、「学歩小景」（同誌二巻二号、明治二九年八月）、「余が宗教的信仰の一景」（同誌、二巻三号、明治二九年九月）などを書く以前に、明治二二年八月の『六合雑誌』（第一〇四号、第一〇五号）に「社会学の目的及び其範囲」「吾人の社会」という論文をすでに書いている。これらは布川がまだ東京英和学校の神学生当時の執筆かとも思われるが、「……余輩は世の識者に対て希はん

とす何そや今日我国の現状不整頓不規則なるを医さん為め活動的の日本特関の社会学を講究して社会の方針を正常ならしむること之れなり」[27]、「吾人の社会は如何なるものぞ、又如何にして之を進歩せしむるを得るや、蓋し此等の問題は、已に各人の脳裡に存しあるべし、然れども元来社会の現象は、複雑混沌を極め、之を講究する社会学も幼稚なり」[28]として、この当時は専らスペンサー、コントなどの社会有機体論に基いて社会を組成する元素、機関の性質、すなわち、族制・政治・宗教・儀式・産業・言語・智識・道徳などの性質や関連を明らかにするところに「吾人の社会」の現状に対する社会学の目的と範囲を求めていた。そして「……社会学の開祖と称せらるるコント氏は学を講ずるの順序は第一数学次に星学物理化学次に生理の学を研究し最後に社会学を講究すべしとせり然れとも氏の心理学を以て虚妄とせしは惜むべきなり」として心理学、更に帰納法を重要視していたことは注目される。また、「社会発達及類別」をめぐって、「……近来国民主義(所謂国家主義)の政党の如きもの現出し、其思想を普播せんとするは、吾人の最も悦ぶ處なり、然りと雖とも、宗教の内界道徳を主とするものなるを放棄し、今直に政治、法律、風俗、習慣上に応用せんとするは不理と云はざるを得ず、(斯かる宗教家なかるべしと雖ども)余輩は基督教の本義精髄は、国民主義と相反せざるものなり」、「……凡そ社会の変遷に連れ、大に宗教上に茶毒を與ふること多しと雖も、一時の與論は真理に非ず、一坐の吹聴は不易の真理を滅亡する能はざるなり、故に真理及ひ人性に適する宗教は、必ず永続すべし、項日国粋保存論に伴われ、仏教の復興せんとして、漸く宗教上の争論を開かんとす、余輩は宗教の抗争して、政党の如く却て道徳の腐敗を来ささるなきを切望するなり」[29]と論じていた。

無識庵主人(布川孫市)は、当時の混乱する社会的状況と自らの個人的な宗教的苦闘、挫折、遍歴を経て、漸く「社会学的世界観」を形成していく。布川は「宗教家は社会心理的問題に着目すべし」[30]として、「……信仰と云ひ、伝道と云うも其の対手とすべき社会の活勢如何を知らざるが為、今日の不振を来したるなれ、教家若し社会を知らんとせば、先つ社会の現象を研究せよ、特に社会心理的問題に注目を要す」[31]と述べている。特に「(一)人心の傾向」、「(二)民俗の気

質」、「㈢時代の精神」に注目すべしという。社会問題、貧富の懸隔、土地問題、道徳問題等々というも、「活社会」を攻究し「充分に社会学的知識を有し、兼ねて諸般の実説を調査し始めて僅かに其の一斑を知らし得るものと心得て可なり」[32]と社会学の講究を本格的に開始していくことになる。[33]布川は当時の歴史的状況と自らの内面的苦闘に触発されて、この時点ではむしろスペンサーの社会学を離れて、社会心理的現象に基礎づけられた社会と個人の関係を研究するものとして社会学を構想し学問的活動を生涯にわたって持続させていった。これに対して、髙木正義の場合には社会学模索、社会学活動をどのように試みていったのであろうか。

㈠「社会学研究の必要」

約一〇年間に及ぶ米国留学を経て日本に帰国し、早々に東京帝国大学文科大学社会学講師となった髙木正義は日本の学問運動としての社会学にどのようにかかわっていったのであろうか。

髙木正義の社会学模索を検討するうえで、目下のところわれわれが手にし得る彼の著作文献は先に言及したように極めて限られている。[34]限られた資料上の制約があるが、髙木が社会学研究の必要をどのように考えていたのかというところからまず考察していきたい。髙木によると、「社会学は社会一切の現象を網羅し、之を総括して其原理原則の如何を研究するものにして、社会学的諸学科の基礎となる帯となる所のものなり」[35]としていた。更に「社会学は則ち人生社会の全体を究むるが故に、斯学の知識の普及は各社会の根本的改良を促すの基礎たるものなり」[36]として、「社会学研究（講究）の必要」について次の四点を挙げていた。第一に「今我邦現時の状態に顧みるに、社会問題の声は已に識者の絶叫する所にして、工場條例若しくは工場監督官等に就て幾多の論議盛なるものありて、近く眼前に切迫し来れるを示し、之を対岸の火災視し得ざるに至れり。而して此解釈は職として社会学の講究に俟たざるべからざるは明かなる事なり」[37]。第二に、「政治家は社会学を学ばざるべからず」、「社会に関する知識なき先導者を有するは国家の大不

幸、恰も医術を知悉せざる医師に対して病気の治療を委任するが如し其危険云うべからず」[38]。第三に、「現今最も世論に喧びしきは財政問題なり……」、「社会学の研究は此狭少なる心胆を開きて拡大にし、個人的を社会的にし、私慾的を公共的にし、秘密的を公同的に変化せしむべきを信ず」[39]。第四に、「今日の日本は一面過渡の時機にあり、一面社会改良の時代にあり……」、「されば社会改良は先づ社会を科学的に究むる所ありて改善せられ成就せられるものと云うべし」として、以上四つの理由を挙げ、更に家族問題、労働問題、犯罪問題等との関係において社会学講究の必要性を説いていた。

更に我が国「学界の大勢を観るに社会学的知識甚だ浅薄を極むるものあり、吾人は刻苦以て斯学の大成を期せさるべからず」。「……実際社会の形勢を見れば、日清戦争後、工業の勃興となり、財政の困難となり経済の状態益々危急にして外国との交渉は層一層頻繁を極め、社会問題の続出絶へざらんとす。是千載一遇にして、社会学を究め社会問題を科学的に解釈するの好時機今日を措て将た何の時にか期すべき」[40]と記していた。外国で新興の社会学や経済学を学び約一〇年に及ぶ米国留学から帰国後間もない新進の学者「ドクトル、オフ、フキロソフキー」高木正義が、社会学講師として早速に迎えられて、「人生社会」の全体的な基礎的な解明とそれに基く「社会的改良」のための「社会学」として、「社会学」に託する期待や彼の学問姿勢をよく現わしているといえる。布川孫市が自らの遍歴のなかで苦悶・苦闘から辿りつつあった社会心理的問題や社会学的世界観の軌跡とは多少とも異なっていたのではなかろうか。このことは高木正義の社会学模索が意外と短命であったことと無関係ではないようにも思える。また、「社会学は実際の活動せる社会を実際に究め、之より得たる所は直ちに実行し得べきもの」であり、「若し社会学の研究を以て書冊上の純学問と為し、人生日常の生活に迂遠なるものとなすあらば、是れ未だ社会学の性質を弁せざるものにして、一に哲学的学科と見做すの僻に座すもの」としていたのも興味深いところである。

「社会学研究の必要」(『社会』一巻一号、明治三二年一月)の論稿よりほぼ三年を経て高木は「社会学研究会の本領」と

題する論稿を『社会学雑誌』に載せている。

> 社会学研究会は其名称の如く社会学を研究する会合に外ならず、之れ吾人の始めより期せし所なり、然るに本邦にありては社会なる文字の種々に乱用せられ、学理と解決法とを同一視する者あるが為め往々にして誤解を招くことなきにあらず、假令ば社会主義協会、社会問題研究会等の学理と同時に実際運動を為すものがある為に、社会学研究会も亦政治的意義を有するが如く思惟せらるることなきにしもあらず、然れども本会は未だ曽て政治の意義を含みたることなく、将来と雖も純然たる学理研究を主となさんとする者なり。(41)

> 吾人は社会学、社会問題及社会政策を研究せんと欲する者なり、各自其研究したる結果に於て意見の衝突、学説の相違あるいは勢いの然らしむる所と云うべし。之れ予め吾人の期する所なり。本会は如上の事項に関して研究する有志の組織する所なれば、同一の学説、同一の見地に立ちて歩武を調ふること能はざる者あり。一人格の統率し支配し管理する所にあらずして研究家の会合なれば必ず爰に至らざるを得ず。(42)

社会問題や時事問題に関しても、社会主義に関する論議や社会学の学説に就いても、「夫れ既に研究的態度に出づと雖も、執筆者は各自由の意志を有す、言論の束縛は何人も敢てすること能はず」と、近代日本社会学の学問運動の組織化のひとつの試みとして自由な研究態度をもつ自由な研究機関であり続けようとしていた姿勢を如実に表わしている。帝国主義化の動き、社会主義運動の実際、国家有機体論の台頭など新たな諸動向を前に、社会学の研究活動を自由に継続しようとする髙木の強い希望を示したものといえる。

(二) 社会現象論と社会学

髙木正義は、社会学それ自体をどのように学問化していこうとしていたのであろうか。「社会的現象論」(『社会』第一巻第七号、明治三二年九月)において、「社会学とは何ぞやとの問題に答ふるに先立ち社会学は一個の学科として研究し

得べきや否やを定むるを肝要とす而して先づ科学とは何ぞやという問題を解釈せざるべからず」[43]という書き出しから始めて、社会学が科学としてとりあつかうべき「社会的現象」の特徴を明らかにしていこうとする。「科学とは宇宙間の森羅万象を集め之を比較し之を類別してその現象を支配する法則を発見すること」であり、科学がとりあつかう現象には通常大別して「無機的現象」、「有機的現象」、「心理的現象」の三種の現象に分けられるが、高木正義は「ギヂング」(「ギディグス」(F. H. Giddings, 1855-1931)の心理的現象を重視する社会学の考えを参照しつつ、「以上三種の現象に加ふるに第四種の現象あることを発見せり。即ち社交的現象是なり[44](傍点筆者)」。そして「是に由て心理学を以て生物学と別科の科学なることを許さば、従って社会学も心理学と別科学なること明なり。如何というに心理学は個人の心理現象を研究するものにして、社会学は心理の相互に結合して生じたる複雑の現象を論究するものなればなり[45]」として、更に「社会的現象は或は政治上或は法律上に於て又は科学上に於て人類相互の関係よりなる現象なり。是に於てこの現象は個人より生ずるにあらずして、多数の人類に関することに丈も重を置かざる可らず[46](傍点筆者)と、この期における社会心理学的な社会学の立場をすでに明らかにしていた。

「社交的現象」「人類相互の関係」としての社会現象をめぐって、「社会概念論」(『慶應義塾学報』第二三号、明治三三年一月)では、社会概念は「第一は個人的社会にして個人を以て根底とするもの、第二は、狭義の社会にして社会特種の団体を意味するもの、第三は広義の社会にして社会全部を意味するもの」という三つの「観察点」に区分されるが、高木は「社会学の研究は主として第三に属する社会的概念を基礎とせざる可からざるものとす[47]」という立場をとる。更に他の別の論稿「社会概念論」(『社会学雑誌』第四巻二号、明治三五年二月)では、この第三の広義の社会概念の立場から次のように展開していく。

……第三説は広義の社会概念にして広義とは社会の全部を意味するものなり、全部とは国家を対象とすと解釈するも可なれど、

更に一歩を進め国家の境界を限らず、語を換れば宇宙的社会現象と称する方却て妥当なるべし、今日に於ては国家は、支那、朝鮮、欧米各国、数多の数に分れたりと雖も、社会組織の進歩と共に遠き将来に於て更に国家の国家を数多くの国家を統一するの期あるべし、夫れは兎も角、広義の社会概念は凡ての社会を目的とするものにして、あらゆる社会を総合して社会と称するものなり、此の概念を得て社会学は始めて成立するを得べし……(48)

この社会概念の展開は、この時点では建部遯吾などによる国家有機体論的な展開とは明らかに区別されるべき視点といえる。

高木正義の社会学模索の試みの過程で彼の社会学は体系化されるには至らなかったが、「社会学一斑」(1)〜(3)(『社会雑誌』第一〇号、第一一号、第一二号、明治三一年二月−同年五月)に全く予備的な形で構想されていたとも読みとれる。すなわち、「余輩惟ふに、社会学は社会全躰を一大人格として究むものにして、先づ(1)社会とは如何なる者なるや、(2)社会とは如何にして結合するや、(3)如何にして進歩するや等の問に答ふる一科学なり」と述べる。他の論稿との関連を一貫して確認しにくいけれども、高木は社会学を一つには先にみたような社会現象論、あるいは「社会学対象論」(49)(あるいは社会本質論ともいえる)、二つには「社会は如何にして結合するや」にかかわる「社会組織論」(「社会結合力」(50)「社会の組織」(51))、三つには「社会進化論」(52)(「社会の生長」(53))の三部構成として位置づけることができる。

(1)社会現象論(社会本質論)は、すでに言及したように社会有機体論とは立場を異にした「社交的現象」「人類相互の関係」を重視する社会心理学的な立場からの社会学の基礎づけを試み、(2)社会組織論では主に人々・人類を結合して社会を生成・組織・構成していく力としての「社会的結合力」(「社会力」)が論じられる。ここでは、「タード(タルド)の模擬説」「ドユルクハイム(デュルケム)の強圧説」「同情説」「ギッヂングの種類の意識説(同類意識)」「ボードウヰンの思想説」などを検討して、高木は心理的勢力・思想的結合力・欲望に基づく社会結合力によって、「(1)血統上より生ずる結合、(2)愛国の情、(3)経済上の結合、(4)友誼上の結合、(5)美術上学問上の結合、(6)信仰上の結合、(7)言語上の

結合、(8)政治上の結合」などの関係が生成し組織され、社会を結合するに至るという考えを構想しつつあった。

(iii)社会進化論は、「……社会の進化の有無を見んと欲せば、必ずや先づ社会全躰に着眼し、過去の事実と現時の情況を研究して以て之を決せさるべからず」[54]という観点から論じられる。「……社会の進歩に最も肝要なるものは、意思の作用なりと云はさるべからず、初め社会の構成せらるる時や、物理的原因は其重もなるものなりしとするも、其社会の進化する原因は常に心理的なものなり。依是観之、社会の進化は漸次完全なる発達の方面に向って進むと同時に、一個人も共に進歩せさるべからず、二者の関係は極めて密なりと云ふべし」として、あくまで社会進化論の素朴な構想にとどまるもので、しかも極めて抽象的観念的なものにとどまるものであったといえる。社会進化論に関連して、更に、多分に社会改良論ともいえる「社会の目的」について言及すべく予告されているが活字の形では残されていない。

(三) 社会学と社会諸科学(「社会学は他の社会的諸学科の原理なり」[55])

高木によると、すでに触れたように「社会学は人間の団結より起る現象を支配する一般の法則を研究する学」[56]である。今日では、社会学は一個別科学として社会科学、歴史科学のなかに位置づけられるのが通例であるが、高木が社会学模索を試みていた当時においては、高木のように「社会学は社会一切の現象を網羅し、之を総括して其原理原則の如何を研究するものにして、社会学的諸学科の基礎となり帯となる所のものなり」[57]とする古典社会学の総合社会学的立場をとるものが多かった。また、別のところでも、「群集および社会」を広狭に二別するところから「……社会に関する学問も亦た之を二大別となし、一を社会学と称し、他を社会的諸科学と称す、則ち銀行、農工商業等の経済的機関に関する事柄は経済学の研究する所、道徳上の事は倫理学、宗教は宗教学、教育は教育学等皆夫れ〳〵一科学を成して社会学の範囲以外にあるものなり」[58]としていた。このような立場から書かれた高木の論文として、「社会学と経

済学との関係」「社会学と政治学」[59]の二論文がある。

「幾多の社会的科学と社会学との関係中、最も必要なるは社会学と経済学との関係なるべし、何となれば、社会全躰を研究するものを社会学とせば、経済学は其の社会の生命を維持する要素ともいうべき滋養物を社会に與ふる学問なれば、社会文明の消長は経済の発達如何に関するは論を俟たざればなり」[60]。「以て社会学の研究する社会全体と政治学の研究する国家との区別を明らかに知るを得べし、則ち一は社会という一般団結（ゼネラル、ネーム）の名の下に、国家は勿論国家を形造らざるものをも一様に研究するも、政治学は然らず僅かに社会一部分の現象即ち政治的思想より生ぜる結果、制度となり、法律となり、最も進化せる国家を研究す、是に由りて之を観れば、社会学は政治学よりも総括的科学なりと云ふを得べし」[61]という立場をとっていた。社会学と経済学あるいは政治学のいずれにしても「二学の関係たる密接にして而かも相並行する」として、一は総括的・総合的な科学として、他は個別の科学として、位置づけられていた。

「何を以て社会学は社会的諸学科の原理なり」というのかというに、高木は「社会学は一には他科の研究せざる又研究し得ざる根本的原理を研究確立し二には人間各団躰に通ずる一般の法則を研究し以て他科研究の基礎発点となる」[62]がためである。ここから社会学は社会的諸学科、他科研究に対して、「広義」と「狭義」の意義、「広義」の社会学と「狭義」の社会学をもつとも考えられている。後になって、近代日本社会学の展開のなかで家族社会学、農村社会学、都市社会学、経済社会学などの個別分野の社会学を生み出すが、高橋徹の述べておられるような意味で「高木はこうした広狭両義の社会学を構想するばかりでなく、とくに狭義の社会学をもって社会学研究の真骨頂とみなしている。そのかぎりでは、従来の綜合社会学における「綜合点なき綜合」（尾高邦雄）の弊害を克服して、個別的社会科学としての社会学の方向に一歩を進めた企画」[63]と果していえるかどうか疑問である。ここでみる限りでは、やはり基本的にはあくまで社会的諸学科に一般原理及び基礎を提供する科学、総合的な科学「総括科学」、基礎科学としての社会学、総合

社会学が構想されていたと読みとるべきではなかろうか。

㈣ 社会問題についての関心と実証的調査研究

「社会学研究の必要」のところですでにみたように、高木正義は「社会学会」「社会学研究会」に集った人達と同様に、「今日の日本」は、「一面過渡の時機にあり」、「社会問題の時代」であり、一面「社会改良の時代」であるとして社会問題に強い関心を示し、「実際の活動せる社会を実際に究め、之より得たる所は直ちに実行し得べきもの」という立場に立っていた。(64) こうした姿勢は、高木がまもなくして社会学界を去り銀行業務などの実業界に入っていくことになる動きと無関係ではなかったともいえる。

明治三〇年前後の日本の社会問題の状況は、松原岩五郎『最暗黒の東京』、横山源之助の『日本之下層社会』『内地雑居後之日本』などに集約されるように、貧困問題や労働問題などの多くの社会問題が噴出して人々の関心を集めさまざまの運動や救済事業、改良事業、政策課題を促していった。こうした状況のもとで、高木も「貧民の救助」(『社会』第五号、明治三二年七月)、「貧民論」(『社会』第二一号、明治三二年一二月)、「貧民論(承前)」(『社会』第三巻一号、明治三四年一月)などの論稿、講演記録を残している。多くは欧米における貧民救助法の発達やその比較、社会階級と貧民をめぐる「マルサス」「カアルマックス」「ヘンリージョルヂ」「チャーレスブース」などの諸説、貧困の原因、貧民の救助などを概観して貧民・貧困問題の研究の必要性を説いたものである。これらに対して、高木の「滋賀縣南野貧民窟(其一)」(『社会』第七号、明治三二年九月)、「滋賀縣南野貧民窟(其二)」(『社会』第八号、明治三二年一〇月)、「滋賀縣南野貧民窟(其三)」(『社会』第九号、明治三二年一一月)、また「飛騨の白川村」(『社会』第一巻九号、明治三二年一一月)は、明治三二年の夏に滋賀縣南野、更に飛騨白川と高木正義自らが現地に視察して資料を蒐集して書かれたものであった。南野では「……南野に至り其地理、人情、風俗等を視察し且つ村老を寺院に招き百問百答多少の材料を得」てまとめ

られたものであり、白川郷の観察探究は「我国特種の歴史に基き特種の発達をなせる国風民俗を討究して、真個日本に適応せる社会学を組成せんとするものの如きは寥として聞くなし、余の之を憂ふるや久とす」として、坪井正五郎教授の推薦もあって白川郷を訪ねたものである。丁度同じ時期の社会学者布川孫市の足尾銅山鉱毒地調査や細民統計調査の試みと同様に、注目されるべき社会観察の試みであったといえる。[65] 更に「船の社会」(『社会』第二一号、明治三二年一二月)、「モルモン宗に就て」(『社会』第三巻四号、明治三四年四月)なども、自らの多くの航路体験や米国での視察体験などをもとにしたものであった。このような「実際の活動せる社会を実際に究め」るという姿勢も高木の社会学模索のもう一つの特徴であった。

四　むすび

幕末日本の旧藩体制から近代日本社会の形成の動きのもとで、新たな学問運動としての社会諸科学、社会学という学問活動がどのような人々によってどのようにして担われ、どのような学問的特徴を形造り、それらの特徴をわれわれがどのように継承し、あるいは批判的に継承してきたのかという問いは、いまわれわれが現実社会の新たな変動に立ち学問動向の新たな地平、十字路に立たされるときに、顧み、見据えなければならない重要な課題のひとつであると考える。

本稿では、「高木正義の社会学模索」と題して、明治期社会学界の立役者のひとりである高木正義(一八六三―一九三二年、文久三―昭和七年)の社会学活動を少しでも解明する手懸りをつくっていきたいという意図のもとで、主に(1)高木正義と明治三〇年前後の社会学界、(2)高木正義の社会学模索の二点に焦点をあてた。依然として資料の不足とわれわれの研究の不充分さから、高木の生涯の足跡や著作文献資料もいまだにその全体像をとらえるのは困難である。「明

治三十年十一月外山教授東京帝国大学総長となるに及んで、ここに社会学講座担任を去り、代って高木正義及び建部遯吾両講師が、これを分担することとなった。高木講師は爾後明治三十四年七月まで社会学講座の事実上の担当者であった。同講師は「社会学」と題して主としてギディングズ(F. H. Giddings)の社会学を祖述した。奉職の期間は僅かであったが、心理学的社会学の移植について同講師の力を多としなければならない。」(『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』九頁)、「いずれにせよ、思想の未熟性や理論の断片性を蔵していたとはいえ、高木は従来の「有機体論社会学」を「心理学的社会学」の方へ転換させるうえでの転轍器のごとき役割を果たすものであった。そしてそれを機に遠藤、樋口、小林の心理学的社会学が展開してゆくのである」(高橋徹『近代日本の社会意識』三五三頁)とされながらも、高木正義の社会学については布川孫市についてと同様に充分な研究がなされてこなかったといわなければならないだろう。

ここでは、(1)高木正義と明治三〇年前後の社会学界に関しては、(i)高木正義の略歴と著作、(ii)社会学講師高木正義、(iii)「社会学大会」「社会学研究会」などにみる明治三〇年前後の社会学界について言及してこれまで彼の生涯や著作に関して不明であった部分を幾分なりとも明らかにして今後の研究に足掛りを得ることができたと考える。(2)高木正義の社会学模索に関しては、同じ時期に社会学活動を展開していた布川孫市の社会心理学的な社会学の試みの場合と対照しつつ、(i)社会学研究の必要、(ii)社会現象論と社会学、(iii)社会学と社会諸科学との関係、(iv)社会問題についての関心と実証的調査研究、の諸点について検討した。高木の社会学模索は、たとえ短命であったとはいえ近代日本社会学の形成期において布川らと共に学問運動のなかにいちはやく本格的に科学として社会学模索を試みたものとして高く評価されるべきである。比較的に自由な研究態度をもって、人々・人類を結合して社会を生成・組織・構成していく力としての「社会的結合力」「社会力」を基点とする高木の心理学的社会学の立場は、「有機体論社会学」から「心理学的社会学」へ転換させる「転轍器」の役割と位置づける段階論的な評価よりも、たとえ時代状況のもとで優勢劣勢の

評価があるとしても、「有機体論社会学」、国家有機体論的な社会学の動向もその後全く退潮したり消滅していったわけではないのであり潜在顕在し復古していく力をもち得るのであり、いくつもの社会学上の視座・立場の競合状況における心理学的社会学の形成と展開の動きとして位置づけることが可能である。高木や布川らによる心理学的社会学の模索をここではそのような試みの苦闘として理解したい。

高木正義は、建部遯吾が外国留学から帰国し東大教授になった前後を区して明治三〇年代後半以降はむしろ社会学界を離れて実業界に入っていった。晩年は布川孫市の所懐によると（高木は）「事志と違い現今は天津に在住」して、最期は中国人民による抵抗運動、抵抗戦線がいよいよ強められつつあった激動の中国天津で客死して生涯を閉じている。学問も社会の動きも、人間の歩みとともにあることを考えざるを得ない。

（1）川合隆男「解題」（『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』の復刻）『明治期社会学関係資料』第一巻、龍渓書舎、一九九一年、一―三〇頁。
（2）河村望『日本社会学史研究（上）』人間の科学社、一九七三年、一九九頁。
（3）秋元律郎『日本社会学史――形成過程と思想構造――』早稲田大学出版部、一九七九年、七五頁、七七頁、八二頁。
（4）高橋徹「日本における社会心理学の形成」（『今日の社会心理学』一巻所収、培風館、一九六五年）高橋『近代日本の社会意識』新曜社、一九八七年。
（5）高橋『近代日本の社会意識』新曜社、一九八七年、三五三頁。
（6）『実業家人名辞典』東京実業通信社、明治四四年、「タ之部」四七―四八頁。
（7）高木正義『高木三郎翁小伝』明治四三年三月刊、八七―八八頁。
（8）高木三郎（一四八一―一九〇九、天保一二―明治四二）。外交官、実業家。庄内藩士黒川武太夫の三男として江戸に生れ、のちに高木家を継ぐ。勝海舟の塾で蘭学を修め、のち横浜で軍艦修業更に慶應三年四月には米国留学をして、米国在留弁務館書記、代理公使、サンフランシスコ副領事、ニューヨーク領事となった。明治一三年に退官して、横浜に同伸会社を興し明治三一年には社長となり、明治四二年に六九歳で没した。『新編庄内人名辞典』昭和六一年、四二九頁。古林亀治郎編『実業人名

辞典』(復刻)、立体社刊、一九九〇年、「タ之部」四二頁。高木正義『高木三郎小伝』明治四三年。『福沢諭吉全集』(第十七巻)には、サンフランシスコ副領事当時の高木三郎に宛てた福沢諭吉の書翰が収められている。明治八年九月八日付の書翰である。一八七―一八八頁。

(9) 川合「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」『法学研究』第六六巻三号、一九九三年三月。

(10) 布川孫市「明治三十年前後の社会学界、社会運動についての追懐談」『社会学雑誌』第五三号、昭和三年九月、九九頁。

(11) 『青山学報』第九九号、昭和七年三月二八日付に高木正義の訃報あり。高木正義の消息に関しては、青山学院大学資料センターで資料閲覧の機会を与えていただいたことに記して感謝したい。同センターの伝農和子さんにもご教示いただき感謝したい。

(12) 『天津居留民団三十周年記念誌』昭和一六年、四四四頁。昭和六年一一月の時点での高木の居住地は「天津仏蘭西租界二号路三二」となっていた。

(13) E・F・フェノロサ(金井延筆記)『フェノロサの社会学講義』(秋山ひさ編・解説)神戸女学院大学研究所、一九八二年。

(14) 『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』、昭和二九年、九頁。

(15) 布川「明治三十年前後の社会学界、社会運動についての追懐談」(前出)、九九頁。

(16) 『早稲田百年と社会学』早稲田大学社会学研究室、一九八三年。

(17) 鎌田栄吉「自伝を語る」「慶應義塾へ入学」「慶應義塾卒業以後」『鎌田栄吉全集』第一巻、一四四―一七九頁。『慶應義塾百年史(別巻・大学編)』(前出)、九六頁。

(18) 慶應義塾福沢研究センター編『創立百二十五年慶應義塾年表』、一九八五年、一六頁。

(19) 林毅陸「私の思出――大学部開設五十年――」『三田評論』昭和一五年六年、八頁。

(20) 『慶應義塾百年史(別巻・大学編)』(前出)、九六頁。

(21) 同書、五一四頁。

(22) 同書、二二五頁。

(23) 同書、二三三頁。『慶應義塾学報』(第五二号、明治三五年五月、九六頁)には「高木正義氏は第一銀行京城出張所主任として渡韓するに付義塾大学講師を辞任せり」と記されている。

(24) 建部遯吾(一八七一―一九四五年、明治四―昭和二〇年)。建部は、一八九三(明治二六)年に東京帝国大学文科大学哲学

科に入学、在学中に、『陸象山』『哲学大観』を刊行、一八九七年四月大学院入学、一八九八（明治三一）年八月ドイツ留学、一九〇〇年フランス、ロシアへ行き、一九〇一年一〇月に帰国、東京帝国大学教授となる。一九〇三年大学に社会学研究室を設置。明治期の「社会学会」「社会学研究会」の学会活動には直接に加わることはなかったが、大正二年の「日本社会学院」の創立には京大の米田庄太郎らと共にその中心となった。

『慶應義塾学報』（第五六号、明治三五年九月、八三頁）では、「大学部新講師」の欄に「……又義塾にては社会学講義を帝国大学文科大学教授文学博士建部遯吾氏に嘱托せり」とある。『三田学会雑誌』（第二巻二号、明治四二年九月）には「『人間の発達』　文学博士建部遯吾君述」が掲載されている。

(25) 川合「解題」（一九九一年）（前出）、川合「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」（前出）。
(26) 布川孫市「明治三十年前後の社会学界、社会運動についての追懐談」（前出）、九九―一〇〇頁。
(27) 無識庵主人「社会学の目的及び其範囲」『六合雑誌』第一〇四号、明治二二年八月、三一頁。
(28) 無識庵主人「吾人の社会」『六合雑誌』第一〇五号、明治二二年九月、二七頁。
(29) 同、三四頁。
(30) 布川孫市「宗教家は社会心理問題に着目すべし」『日本宗教』第一巻九号、明治二九年三月、五四七―五五二頁。
(31) 同、五四九頁。
(32) 同、五四七頁。
(33) 川合「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」『法学研究』第六六巻三号、一九九三年三月、一八―二〇頁。
(34) 高木正義がアメリカ、ボルチモア、ジョンホプキンス大学での研究テーマや博士論文の内容等についても遺憾ながら不明である。
(35) 高木正義「社会学研究の必要」『社会』第一号、明治三二年一月、三一頁。
(36) 同、四四頁。
(37) 同、三二頁。
(38) 同、三三―三四頁。
(39) 同、三五頁。
(40) 同、四一―四二頁。

(41) ドクトル　高木正義「社会学研究会の本領」『社会学雑誌』第一号、明治三五年二月、九頁。
(42) 同、九―一〇頁。
(43) 高木正義「社会的現象論」『社会』第一巻七号、明治三二年九月、二〇頁。
(44) 同、二一頁。
(45) 同、二三頁。
(46) 同、二五頁。
(47) 高木正義「社会概念論」『慶應義塾学報』第二三号、明治三三年一月、二二頁。
(48) 高木正義「社会概念論」『社会学雑誌』第四巻二号、明治三五年二月、六〇頁。
(49) 高木正義「社会学の対象」『社会学雑誌』第四巻三号、明治三五年三月、このなかで「社会とは或る期間中に於て共同生活の関係を有する人間の群集なり」(一六二頁)と述べている。
(50) 高木正義「社会学一斑(2)」『社会雑誌』第十一号、明治三一年四月。
(51) 高木正義「社会生理一斑」『社会』第三巻七号、明治三四年七月、四六一―四六三頁。
(52) 高木正義「社会学一斑(3)」『社会雑誌』第十二号、明治三一年五月。
(53) 高木正義「社会生理一斑」(前出)、四六三頁。
(54) 高木正義「社会学一斑(3)」(前出)、一一頁。
(55) 高木正義「社会学は他の社会的諸学科の原理なり」『哲学雑誌』第十三巻一三六号、明治三一年六月。
(56) 同、四三九―四四〇頁。
(57) 高木正義「社会学研究の必要」(前出)三一頁。
(58) 高木正義「社会学の対象」(前出)、一六三頁。
(59) 高木正義「社会学と経済学との関係」『社会』第三巻六号、明治三四年六月、高木「社会学と政治学」『社会』第三巻八号、明治三四年八月。
(60) 高木正義「社会学と経済学との関係」(前出)、三七頁。
(61) 高木正義「社会学と政治学」(前出)、三一頁。
(62) 高木正義「社会学は他の社会的諸学科の原理なり」(前出)、四四〇頁。

(63) 高橋徹「日本における社会心理学の形成」『近代日本の社会意識』所収、新曜社、一九八七年、三五二頁。
(64) 高木正義「社会学研究の必要」(前出)。
(65) 川合「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」(前出)、二六―二九頁。